

深く眠ろう、死の手前ぐらいまで

登場人物 博士

柳原

女

男

老女

冬山の奥深く。

白衣を着た男・柳原と老人が現れる。

柳原は黒い大きな袋を、老人は柳原の片方の足を、ウンウン言いながら引っ張っている。

柳原 博士……少し休みませんか？

博士 なにを言うんだ柳原君！ 研究所はすぐそこじゃないか。頑張りたまえ。

柳原 ……もう頑張れそうにないんです。

博士 気のせいじゃ！ 若いくせになにを言つとる。わしを見たまえ！

二人、手を休めてお互いをじっと見る。

二人とも肩で息をしている。

柳原 ……大分お疲れのようですが……。

博士 いいや、元気いっぱいじゃ！ 第一、こんなところで休んで人に見つかったらどうする。行くぞ！

柳原、再び袋を引きずり始め、博士も柳原の足を引っ張る。

柳原 ……博士……。

博士 なんだね。

柳原 ……「足をひっぱる」という慣用句をご存じですか？

博士 余計なおしゃべりはひかえたまえ。疲れが増すばかりじゃよ。

柳原 ……もしくは「足手まとい」という言葉を……

博士 なにが言いたいんだね。

柳原 ……博士？

博士 なんじゃ。

柳原 僕が博士を尊敬していることを忘れないでくださいね。

博士 早く言いたまえ！

柳原 ご好意は大変ありがたいのですが、そんなところを引っ張られましても仕事ははかどりませんし、我々の疲労も増すばかりなんですけど……。

間。

博士 (唇を噛みしめ) ……どうすればいいんだね。

柳原 そちら側にまわって押していただけると、思いがけないほど効率があがるんですが……。

博士 最初に言いたまえ、最初に！ (押し始める) こうか。

柳原 恐れ入ります。

博士 君のそのまわりくどさは時々ひどくわしを傷つけるよ。

柳原 申し訳ありません。

二人のあとを追って来たように若い女が現れる。

女 ちょっと待ちなさいよ！

博士 (押しながら) ほら、言わんこっちゃない。こんなところでぐずぐずしているからじゃ。君のせいだぞ、柳原君。

柳原 すみません。(引っ張る)

女 待ってって言うてんのが聞こえないの！

柳原 …… (博士に) 待ちますか？

博士 いや、わしにまかせたまえ。

女 それはあたしのよ！ どこに持ってこうっての！

博士 ふっふっふ。こんなこともあるうかと、コイツを持って来とるんじゃよ。(白衣の懷からサツマイモを取り出し) えいっ！

と、女の目の前に突きつける。

女、動じない。

間。

博士、「とおおっつ！」と持っていたイモを女の後方に投げるが、大きなモーションのわりに、イモは遠くに飛ばない。

女は動かない。

間。

博士、急いで再び荷物を押し始める。

博士 さ、柳原君、今のうちに。

柳原 ……見事な作戦です。博士。

博士 (立ちつくす女を振り返り) 君、イモはホレ、あっちだぞ。遠慮は無用じゃ、ささ、追いなさい追いなさい。

女 ……。

博士 珍しい女性だな。イモが好物ではないらしい。

柳原 そう見えるだけで女性ではないのかもしれないかもね。

女 あんたたちの冗談につきあってるひまないの！(袋に飛びついて引っ張る)

博士 あっ！なにをする！

女 返しなさいよ！

女、博士、柳原がもみ合いながら袋を引っ張っているうちに、袋の口から腕がごろんとはみ出る。

柳原・博士 ……あくあ。

柳原、腕を袋の中に戻そうとする。

女 触らないで！ それはあたしの死体なんだから！

柳原 ……あなたの死体？

女 そうよ。

柳原 ということは（腕をつまみあげ）これはあなたなんですか？

博士 わしはてつきり男だと思つとつたよ。だってヒゲがあるぞ？

柳原 やはり女性ではなかったんですね。

博士 （うなずき）どうりでイモを……。

女 主人よ！

柳原 ご主人？ これが？

女 そうよ！

柳原 ……あなた死体と結婚したんですか？

女 誰がそんなことするのよ。

柳原 でしたら人違いですよ。この人は死んでるんですからね。

女 さつき死んだのよ！

柳原 今、死んでるんです。この人は。

女 だから！ さつき死んだから今も死んでるの！ とにかく、それはあたしの…

…あたしの主人の…えっと…主人は…あたし…？（考え込む）

柳原 （博士に）行きましょう。

博士 いいぞ柳原君！ 君の融通のきかなさは時々すごい武器になるな。

柳原 ありがとうございます。

女 （ハッと我にかえり）主人をどうしようっていうの！

柳原 我々は死体が必要なだけであって、あなたのご主人に用はありません。

女 つべこべうるさいわねっ！（きゅくぐるぐると、大きなおなかの鳴る音）

間。

柳原 ……うるさいのはあなたのようにですが。

博士 だから遠慮はいらんと言ったろう。さ、早くイモを食いたまえ。生^{なま}だが。

女 (博士の胸倉をつかみ) ふぎけやがってこのクソジジイ……!!

博士 腹を空かせているわりにはすごい力じゃよ、柳原君。

女 ぶっ殺してやる!

博士 ぶっ殺す? (柳原を振り返り) どういう意味だね?

柳原 ぶっ殺すんですからぶつんでしよう。そして殺すんです。

博士 ぶつたくらいで死ぬかね?

女 なめんなよ、ジジイ!

柳原 あ、すみません、ちよつと失礼。(と博士を女から取り返し) いい考えがありますよ博士。

博士 なんだね。

柳原 とりあえずこの死体は彼女に返してやるんです。

博士 なぜじゃ! わしがあんなに苦労してやつとここまで運んだというのに。

柳原 いえいえ、苦労して運んだのは僕なんですけどね。とにかく、そこですよ。

死体を返されたところで、彼女があれを運べるわけありません。

博士 (襟もとを直し) 結構力はあるようじゃが……。

柳原 一人ではまず無理でしょう。仮に助けを呼ぶにしても、国道までは約一〇キロ、電話があるのは二〇キロ先になります。その上、彼女はお腹が空いているんです。(女に) ね?

女 ほつといてよ!

柳原 疲れてますか?

女 あたりまえでしょ!

柳原 眠いんですね?

女 それがどうしたのよ!

柳原 寒くありませんか?

女 なんなのよ、あんな。

柳原 (博士に) ほら、思ったとおりですよ。

博士 なんなんだ君は。

柳原 いいですか? 寒い、眠い、お腹が空いた。これは凍死の三大条件です。彼

女はこれらをすべて満たしています。このまま死体と一緒に放っておけば、凍死は時間の問題です。

博士 そうするとなにか、わしらはもう一つ死体を手に入れることができるというわけか？

柳原 その通りです。

博士 君は天才だよ、柳原君！

柳原 恐縮です。

博士 そうと決まれば、あの女に気づかれんうちに早く帰ろう。

女 まる聞こえなんだよ！

博士 おお、そうか。まあそういうわけで、わしらはこれで失礼するのにな。

柳原 (お辞儀をしながら) ごめんください。(と去りかける)

女 ごめんくださいって……礼儀正しきやいってもんじゃないでしょ。ちよっと、ねえ！ おい！ 柳原！

二人、振り向く。博士は異様なまでに驚いている。

柳原 ……なんですか？

女 あたしを見殺しにする気？

柳原 そうですね？ まる聞こえだったんじゃないんですか？

女 冗談じゃないわよ！

柳原 まあまあ。あとで迎えに来てあげますから、言いたいことがあったらメモしておいてください。それをちゃんと読みますよ。約束します。

女 (柳原につかみかかり) あたしが死んだあとだろうが！

博士 (女に) なぜ柳原君の名前を柳原と知つとるんじゃ！

女 ひっこんでろ！ もうろくジジイ！

柳原 (ウンザリして) ああ、もうよしませう。僕は複雑な人間関係というのが大の苦手なんです。

女 あんたたちが話をややこしくしてるのよ！

柳原 僕らはあなたに死体をお返しするって言ってるんですよ？ コレをどこへ運ぼうが、凍死しようが、あとはあなたの問題です。

女 困るだけなの！ そんなことされても！ 大体あんたたちがこんな山奥に死体を持ってきちゃったせいじゃない。責任とってよ！ どうにかしてよ！

柳原 どうにかつてですから迎えに来るって言うてるじゃないですか。あとはこれにメモを……（ポケットから紙と鉛筆を取り出す）

女 （その手を払いのけ）黙って聞いてりゃいい気になりやがつて……。

柳原 あなたさつきからちつとも黙ってないですよ。

女 あたしを怒らせてタダですむと思ふなよ！

柳原 ……「腹が立ったら十数えよ、なおやまなかつたら百数えよ」という西洋のことわざをご存じですか？

女 知るか！

博士 いいぞ！ 柳原君。長期戦に持ち込んで体力を消耗させようという魂胆じゃな？

女、博士を怒鳴りつけようと口を開くが、お腹の鳴るすさまじい音に気をそがれてへたりこむ。

女 どうしてあたしがこんな目にあわなくちゃいけないのお。

柳原 我々はあなたが憎くてこんなことしてるわけじゃないんですよ。だってあなた、この死体どうするんです？ 焼いて埋めちゃうんでしょう？ だったら我々に譲ってください。有効に再利用してみせますから。

女 主人は牛乳パックじゃないのよ！

柳原 こっちだって別にトレットペーパーを作るわけではありません。

博士 そうとも！ これは君にだって悪い話ではないはずじゃ。

女 葬式の費用でも出してくれるっていうの？

博士 まあ、似たようなものじゃな。

女？ どういうことよ。

博士 葬式代は出せんが、それを浮かしてやろうというわけじゃ。

女 なによ、それ。

博士 ご主人を生き返らせるのじゃ。

女 ……。

博士 わしの長年の研究が実を結ぶ時がやってきたのじゃ！

女 頭おかしいんじゃないの？

柳原 実験台が必要なんです。

博士 そうじゃ！ 今にも起き上がりそうなこの活いきのいい死体が実験には打ってつけなのじゃ！ 葬式代が浮くばかりか、また夫婦仲良く暮らせるのだ。うれしかろう？

女 迷惑よ。

博士 なにに？

女 二年半我慢してやっと死んでくれたのよ？ 生き返らせるなんて縁起でもないこと言わないで！

柳原 生き返ったら、また殺せばいいんです。

女 ……誰がやるのよ。

柳原 あなたに決まってるじゃありませんか。ご主人を死なせたがっているのはあなただけなんですから。

博士 そうじゃそうじゃ。ぶつ殺すというヤツをぜひ見せてくれ。

女 (博士に) 殺すとしたらあんたからだからね！

柳原 ヤル気充分じゃないですか。

女 (キツとにらみ) とにかく！ これは渡さない！ あんたたちは死体ならなんでもいいかもしれないけど、あたしにはこの人じゃなきゃ意味がないの！

博士 なんでもとは失礼な。出来るだけ死にたての新鮮なものを探しておるんじゃ。しかし、おまえが代わりに実験台になるというのなら、それでもよかろう。

女 死体泥棒が偉そうな口きくんじゃないわよ！

博士 ……夫を死体呼ばわりするとは……嘆かわしい……。愛し合っておらん夫婦はもはや夫婦ではない！ したがってこれはおまえの夫ではない！ (笑顔になっ

て)だからこれはわしの……

女 その手には乗らないわよ!

柳原 とにかく研究所に行きましょう。いずれにしても、今から町に戻るのは無理ですよ。あなたは疲れています。なにか食べなければ本当に死んでしまいますよ? 我々はそれでも一向にかまいませんが。(辺りを見渡し)もう暗くなってきましたし、連絡を取るのには研究所に戻ってからのということにして……。それに僕はこう見えても南房総の生まれなんです。

女 ……それがどうしたのよ。

柳原 南房総と言えば、房総丘陵に北風がさえぎられるため年間平均気温が十六℃という温暖な土地です。春には菜の花、冬にはポピーと一年を通して花が咲き乱れ……

女 あんたのお国自慢なんて聞きたかないわよ!

博士 (ため息) 柳原君……。悪いクセだぞ。もってまわった言い方はよしたまえ。なぜ素直に「寒さに弱いから早く帰りたい」と言えんのだ。

柳原 申し訳ありません。

博士 (女に) こういう事情なのでな。さ、早く来たまえ。食べ物も用意しておく。

女 いやよ! あんたたちみたいに変人の棲みかになんか誰が行くもんですか!
(おながが鳴り始める) 絶対に行かないわ!

女のおながが鳴り続ける間。

柳原 ……自己顕示欲の強い胃袋ですね。

博士 心と体は裏腹じゃな。

女 こんな山奥の研究所なんてそんな怪しいところ、あたしは絶対に絶対に絶対に
行かない!

おなかの鳴る音が叫び声のように大きくなっていくのにつれて暗転。

研究所。とは名ばかりの粗末な農家。

中央の囲炉裏では、女がガツガツ音をたてて食事をしている。

柳原はその横で給仕をしている。

部屋の奥には二つの大きな箱があり、その一つに博士がせっせと大根の葉を詰めている。

女 (茶碗を柳原に突きつけ) もっと。

柳原 (渋々ごはんをよそい) ……たぶん知らないんでしょうからお教えしますけ

ど、日本には昔から「居候、三杯目にはそっと出し」という言葉があるんです。

女、茶碗を奪いとり、再びガツガツ食べ始める。

そこへ作業を終えた博士が囲炉裏にあたりにやってくる。

博士 昔うちにいた次郎だってそんなには食わなかったぞ。

柳原 どなたですか？

博士 次郎か？ 牛じゃよ。昔飼ったんじゃが、満腹という言葉を知らんヤツ
じやった。

柳原 知らない言葉は「満腹」だけではないんじゃないですか？ 牛なんですか
ら言葉は……

博士 ああ、わしが悪かったよ！ 言葉のあやじゃ。まったく君って男は……。

女 (箸を投げるようにして食事を終え) 電話貸して。

柳原 ……知らないのなら是非覚えておくことをお勧めしますが、食事の後には「ご
ちそうさま」と……

女 早くしてよ！ 助けを呼ぶんだから。

博士 覚えておいて損はないぞ、「ごちそうさま」は。ほれ、言ってみなさい。せー

の……

女 (博士の「ごちそうさま」の声にかぶって) 電話を貸せって言うてんのよ!

柳原 出来ません。

女 出来ないだあ?

柳原 誤解のないように言うておきますが、なにも貸すのが惜しくてこんなことを言うんじゃないんですよ? そんなにケチではありません。その証拠に、言われるがまま四杯もごはんをよそってあげたじゃありませんか。

女 いいから電話!

柳原 ないんです。

女 ……ない?

柳原 こんな山奥にどうして電話があるんですか?

女 ……話が違うじゃない!

柳原 違いますよ。僕は言ったはずですよ。公衆電話までここから二〇キロあるつて。

女 だって、連絡を取るならとりあえずここに来てからつて……。

柳原 来てからあなたちゃんと腹ごしらえしたじゃありませんか。

女 だましたわね!

博士 (囲炉裏の鍋をのぞき込み) だまされたのはこっちじゃ! いくら腹が空いとるからつて、丸一日分の食糧をたいらげるなんて話聞いとらんぞ!

女 あたしはどうなるのよ!

柳原 エネルギーは充分補給したんですから、走つて帰つたらどうですか?

博士 (お櫃に残ったご飯粒をつまみ) そうじゃそうじゃ。わしらはおまえのような呆れるほど元気な人間に用はない。

女 (ハツとして) ……主人をどうしたのよ。

柳原 博士、大根もう少し煮ましようか。

博士 そうじゃなあ。ついでにぬか漬けも切ろうかの。

女 とぼけるな! 主人はどこよ!

博士 ……なにを言つとるんだ今さら。

柳原 食べることに全神経を集中させていたんですね。なかなか真似できることでは
ありません。

博士 まったくだ。

女 なにをしたのよ！ あの人に！

博士 実験じゃ。

柳原 実験はもう始まったんです。

柳原と博士がゆっくりと振り返る。その先には大きな箱、棺が二つ。

女は蓋の空いている方に駆け寄って、中をのぞく。

女 ……なによ、これ！

博士 実験じゃと言うておるのに、わからんヤツじゃな。

女 (棺の中から大根の葉をつまみあげ) 主人を漬物にする気!!

博士 安心したまえ。ご主人はきつと蘇える。そうしたらおまえに返してやろう。

女 わかんないのはどっちよ！ 生き返ったりしたら困るって言うてるでしょ!!

博士 なぜ困るんじゃ。

柳原 (淡々と) 保険金ですか？

間。

女、気まずそうに黙っている。

博士 ……柳原君、今、なんと言ったのかね。

柳原 は？

博士 なんと言ったのかと訊いとるんじゃ。

柳原 ああ、えーっと、「保険金ですか？」と言いました。

博士 どういうことだね、それは。

柳原 ご主人が亡くなれば保険金がもらえるのかなあと思って訊いてみたまでです
が。

博士 どういう意味なんだね！ それは！

女 そうよ！ あたしが欲しいのは保険金よ！

博士 （厳しく）柳原君に訊いとるんじや！

柳原 ああ、失礼しました。博士がお知りになりたいのは、「保険金」それ自体の意
味ですね？

博士 そう言うておろうが。

女 ……あんた、保険金も知らないの？

博士 ば、馬鹿者！ 知つとるわ！ そのお、あの、ほれ……そうじや！ 菌の一
種じやよ。乳酸菌とか納豆菌の仲間じやった。ああ、思い出せてひと安心じや。

女 納豆菌？ なに言ってるの。

博士 いや、ちよつと違つたかな？ あれはだな、えー……

女 知らないんだ！ 保険金！

柳原 まあまあ。「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」というじやありませんか。

博士 度忘れしただけじや！ 早く教えたまえ！

柳原 生命保険というシステムがありまして、これは契約者が一定の保険料を保険
会社に支払っていますと、事故や病気、死亡した際にこの会社が補償してくれる
んです。この時支払われるお金が、保険金です。

博士 ……。（腕組み）

柳原 ……わかりにくかつたでしょうか？

博士 さつぱりだ。

柳原 早い話が、生命保険に入っていたご主人が死ぬことによつて、彼女はお金が
もらえるんです。

博士 そんなものをもらつてなにに使うんだね。

柳原 さあ……葬式の費用にでもあてるんじやないですか？

博士 （女に）だから葬式代はわしらが浮かしてやるというのに。

女 死ななきやもらえないのよ！ 保険金は！

博士 死なないなら葬式代はいらんじやろう。

女 誰が葬式代に使うつて言ったのよ！

博士 (キツパリ) 柳原君だ。

柳原 僕はそうするんじゃないですか？って…… (女に) あなたも聞いてたでしょ？
う？ 付加疑問文でしたよね、僕が言ったのは。

女 あんなクソ親父のためになんか、一円だって使わないわよ。

柳原 うわあ……死者にムチ打つ発言ですね。

博士 それが愛し合って一緒になった伴侶に言う言葉かね。

女 フツ。……「愛し合って一緒になった」？

女、棺を思い切り蹴る。

女 こいつとあたしは四十も年が違うのよ。

柳原 僕と博士は四十八歳違います。

博士 (柳原に) わしらの勝ちか？

柳原 ええ。

女 勝負なんかしてないんだよ！

柳原 言うまでもないことですが、僕の方が年下なんです。

博士 しかし二人とも申年まゐ生まれじゃ。

柳原 まったくの偶然です。

女 (床をダンダン踏み鳴らし) あたしの話をしてんの！ 今は！

博士 ああ、すまなかつたな。(柳原に) 君だぞ、すぐに話を脱線させおって……。
どこまで聞いたんだ？

柳原 愛があれば年の差なんて、というところまでです。

女 ちがーうっ！

柳原 (博士に) 間違えました。

博士 しっかりしてくれたまえ。……で？ なんだった？

柳原 さあ……。愛がどうかいいうのは確かだと思っんですが……。

博士 (女に) 確かなのか？

女 あんたが言いだしたんでしょ！ とにかくね！ 愛なんてものはこれっぽっち

もなかったの！

柳原 あるのは食欲だけというわけですか。

女 (ヤケツパチ) そうだよ！

博士 それならなぜ結婚したんだね。

女 知らないわよ！ 三年前、社員食堂で働いてたら、その社長に……この人に結婚させられちゃったんだから。

博士 こんなやかましい大メシ食らいのどこが良かったのかね？

柳原 財産目当てに保険金殺人を実行できるような行動力ではないですか？

女 あたしは殺してないわよ！ 別荘の周りを散歩したら、あの人滑って勝手に転げ落ちちゃったんだから！

博士 柳原君！ めか漬けはどうした。

柳原 ああ、そうでした。(取りに行く)

柳原と博士、食事の支度を始める。

女 第一あたしは！ ……ちよっと、なにやってんのよ。

柳原 我々の食事の用意ですよ。当然のことですが、あなたと僕は別個の人間なんですから、あなたのおなががいっぱいになったからといって、僕の空腹が満たされるわけではないんです。(準備が整い) いただきます。

柳原と博士、食事を始める。

女 あたりまえでしょ、そんなこと。あたしは話を聞いてんのかって言うてんの！

柳原 聞いてますよ。食事は耳でするものではありませんからね。でもいいんです。

あなたが殺していてもいなくても、僕らには関係も興味もないことです。

博士 そうとも。わしらは実験が成功さえすればそれでいいんじゃないや。

間。

女 (博士の隣に腰をおろし) ねえ。お願いだからやめてよ。そんな実験、成功するわけないじゃない。ね? 主人を返して。

博士 生き返ったらな。

女 ……。じゃ、こうしよう。主人を返してくれたら保険金を少し分けてあげる。これでどうよ。

間。

博士 ……なにか問題の解決になつとるかね、柳原君。

柳原 一体なにが彼女にああも的外れなことを言わせるのか、僕には見当もつきません。

博士 (うなづく)

女 どうしてよ。実験を成功させてひと山当てようっていうんじゃないの?

博士 (箸を置いて) はあくつ。なんと心の貧しい娘なんじゃ。

柳原 (同じく箸を置いて) おまけに「ごちそうさま」も知らないんです。ごちそうさま。

女 (柳原をにらみ) じゃなによ。どうしようっていうのよ。

博士 妻じゃよ。

女 妻?

博士 あそこで眠つとる。(古い方の棺を見る)

柳原 (食器を片づけながら) 博士は奥様を生き返らせるためだけにこの研究を始められたんです。(片づけに去る)

女 それなら奥さんで実験すればいいじゃない。

博士 おまえ実験の意味がわかつたらんようじゃな。失敗が許されないからこそ、実験が必要なんじゃ。わしの大根を食っておきながら。頭の回転が少しもよくなっていないとは……。

柳原 (布団をかかえて戻ってきて) 「わしの大根」というのは、あなたが食べてし

まった博士の分の大根という意味もちろん含まれていますが、博士が作っておられる大根、ということですよ。

博士 (得意げに) わしはずっと自給自足で生活しておる！

柳原 博士の作る大根は天下一品です。

博士 (気を良くして女に) おまえさん、大根は好きかね？

柳原 博士、これはあくまで僕の推論ですが、嫌いな大根を三人分も食べる人間が果たして存在するでしょうか。

博士 それもそうじゃな。

女 そんなにいい大根が作れるならねえ！ 無駄な研究なんかやめて、ビールハウスでもなんでも作ればいいでしょ！

博士 もう作ったとも。

女 だったらそこでおとなしく暮らしてろ！ そうよ、死体の代わりに土いじってりゃいいのよ！ 奥さんにそっくりな大根でもサツマイモでも作って、勝手に満足してなさいよ！

博士 (柳原に) あんなにわめき続けることがなぜ可能なんじゃ？ 疲れとらんのかね。

柳原 ええ。疲れてないんです。

女 なに言ってるのよ！

柳原 いいかげんに静かにしてください。古い農家の珍しさにはしゃぎたい気持ちわかりますが、僕は疲れているんです。

女 あたしだってへとへとよ！

博士 疲れているなら少しは疲れてるらしいところを見せたらどうなんじゃ。柳原君、あとは頼むよ。わしはもう休む。

柳原 おやすみなさい。

博士、退場。

柳原は布団を敷き始める。

柳原 それではあなたはここに寝てください。

女、不満そうに黙っているが、やがてあきらめたようにポケットから煙草を出して吸い始める。

柳原、布団を敷き終えると女を眺めている。

柳原 ……寝煙草はやめてくださいよ。

女 わかったわよ。

柳原 お便所はこのつきあたりですから。

女 はいはい。

柳原 便器にはフタがしてありますが、必ずはずしてから使用してください。なぜなら……

女 いいわよ！ わかるわよ、それくらい。

柳原 そうですか？

間。

柳原 それから……

女 (かみつくように) なに！

柳原 煙草、あと何本残ってますか？

女 (煙草の箱をのぞき) ……なんでそんなこと訊くのよ。

柳原 何本でした？

女 あんたに関係ないでしょ。

柳原 そうとも言い切れませんよ。

女 どうして？

柳原 煙草が残っているようなら、僕が一本もらえる可能性も残されているということですよ。

女 ……あたしがあげるとでも思ってるの？

柳原 僕が言ってるのは可能性の有無ですよ。「無い袖は振れない」って言うじゃありませんか。

女 ことわざはもうたくさんよ。(煙草を差し出す)

柳原 ありがとうございます。

二人、囲炉裏の前に座って煙草を吸う。

柳原 煙草かあ……。

柳原、おいしそうに吸い込んでから大きく煙を吐く。

柳原 「百害あって一利なし」って言いますよね。

女 返してよ！ そんなこと言うなら！

柳原 一日何本くらい吸うんですか？

女 何本吸おうがあたしの勝手でしょ！

柳原 じゃ、一箱とさせていただきますね？ すると一箱二百二十円掛ける三十で月に六千六百元。六千六百元が十二カ月で……七万九千二百円。三十一日まである月は七回ですから、二月の二日分を引いて、掛けて足すと……八万三百円！ 一年で八万とんで三百円ですよ。

女 はいはい、よくできました。

柳原 煙を出して灰になって、おまけに体に悪いコレに一年で八万三百円かかるんです。

女 ご心配なく！ それっぽっちのお金には不自由しておりませんの！

柳原 お金に困っていないのなら、なぜ保険金が必要なんです？

女 世の中にはねえ、一日二百二十円を三百六十五日払い続けても買えないものが山ほどあるのよ。

柳原 とりあえず煙草をやめることをお勧めしますね。一年で八万三百円、確実に貯まります。うるう年なら八万五百二十円ですよ。

女 もう一本もやらないから、心して吸いなさいよ！

間。

柳原 ……そんなにたくさんのお金で何を買うんです？

女 なにもかもよ。欲しいものぜーんぶ。

柳原 世界征服ですか。

女 フツ……。それもいいわね。

柳原 ……こんなことは言い尽くされていて口にするのもいささか恥ずかしいくらいですが……。この世にはお金で買えないものもありますよ。

女 そんなものいらないわ。金で買えないものなんて欲しくない。

柳原 ああ、それは潔いご意見ですね。

女 ……でもね、大抵のものはお金で手に入るのよ。実際あたしだって、主人に買われたようなもんなんだから。

柳原 死んだ人は買えませんよ。

間。

柳原 どんなにお金を積んでも、死んだ人は、死んだままです。

女 ……わかってるわよ。……それを言うならあの博士に言いなさいよ。

柳原 いいんです。博士はあれで。……じゃ、僕もそろそろ失礼します。

女 ……ちよつと……。あたし一人でここに……。死体と一緒に寝るの？

柳原 そうですけど、なにか？

女 なにかって……。

間。

柳原 あなたまさか死体が生き返るとでも思ってるんですか？

女 思っていないわよ！ あんたたちでしょ、そう思ってるのは。

柳原 僕は違います。死んだ人は死んだままだと今言ったばかりじゃありませんか。

女 じゃああんたここでなにやってるのよ。

柳原 死人を生き返らせる研究をしているのは博士です。僕はただの助手にすぎません。

女 だって……。

柳原 (去りかけて足を止め) ……僕がなぜ、博士に黙って従っているかわかりますか？

女 わかるわけないでしょ！

柳原 ……狂ってるんですよ。

女 え？

柳原 博士は、気が狂ってるんです。

暗転。

3

夜。

辺りは暗く、囲炉裏の近くで女が寝ているのが辛うじてわかる。

その後ろで男らしき人影が動く。

男 あのー……。

女 (反応なし)

男 ちよつと、すみません。

女 (反応なし)

男 ……緊急を要する事情がございまして……。

女 ……なによ。

男 おやすみのところ、本当にすみませんが……お手洗いはどこでしょうか？ すっかり冷えてしまっています……。

女 ……あっち。

男 ……あっち……とおっしゃいますと……。

女 (布団から手だけ出して) あっちのつきあたり！

男 ご親切にどうも……。どうぞ、ごゆっくりおやすみください。(そそくさと去る)

女 ……なんなのよ、もう……。

辺りが明るくなり、博士が小走りに現れる。

博士 こらあ！ いつまで寝とる！

女 ……まだ暗いじゃない。

博士 もう夜は明け始めておるんじゃ！ 起きろ！

女 今ゆっくり休めって言ったくせに……。

博士 なにを寝ぼけたことを……。早く起きんか！ (と、布団をはがそうとする)

女 いやだ！

柳原 (現れて女に) あれ？ なにしてるんですか？

女 見りゃわかるでしょ！ 寝てんのよ！

柳原 そんなはずありませんよ。

女 (布団にもぐり込み) 寝てるったら寝てるの！

柳原 おかしいなあ。

博士 なんだ、君まで寝ぼけとるのか。

柳原 だって、それなら今、お便所に入っているのは誰なんですか？

男 (ハンカチで手を拭きながら現れ) いやあ、どうもどうも。

女、布団から飛び起き、驚きのあまり凍りつく。それとは対照的に、博士はみるみる顔を輝かせている。

柳原はただ呆然としている。

男 なつかしいですなあ。私の子どもの頃はどこの家でもお手洗いはああでしたよ。

博士と女、柳原に向かってほぼ同時に

博士 大成功じゃ！

女 話がちがうじゃない！

男 (女に) ああ、お嬢さん。先ほどはありがとうございました。一刻を争う状態だったもので、ご無礼をお許しください。

女 ……お嬢さん？

男 ところでここはどこなんです？ あなた方はこのお家の方ですか？

女 ……ちがう……。

博士 なんだ、人違いなのか？

女 そうじゃないわよ！

柳原 恥ずかしがることはありませんよ。よくあることです。先日、僕もやりました。てっきり博士だと思って話しかけたら、畑を荒らしに来たタヌキだったんです。

博士 そういうのも人違いと言うのかね。

柳原 まぎれもなく人違いでしょう。人と違ったんですから。

女 主人よ！ 確かに主人なんだけど……。こんな愛想のいい人じゃなかったのよ……。無口で、いつも怒ってるみたいで、人に頭なんか下げたことない人だったのに……。

博士 生前と別人になってしまいうんじゃあ大成功とは言えんなあ。ただの成功ぐら

いにしておこうか。のお？ 柳原君。

柳原 適切なお判断です。

女 (博士につかみかかり) どうするのよ！ この始末を！

男 (柳原に) あなたの奥様でいらっしゃいますか？

柳原 いいえ。あなたの奥さんということになっていますが。

男 私の？ このお嬢さんが？

男、長い間考え込むが、ハッと顔をあげて

男 (喜びにあふれ) 鰐子！ 鰐子か？

博士 わにこお？ ケツ。変な名前だな。

男 会いたかったよ、鰐子！

柳原 失礼ですよ、博士。凶暴なところからつけられたあだ名に決まってるじゃありませんか。

女 悪かったわね！ 本名で！

柳原 じゃあきつとご両親が、ワニのように凶暴な子に育つようにとの祈りを込めて名付けたのでしよう。

博士 ご両親の願いは叶えられたわけじゃな？

柳原 その通りです。

女 うるさい！

男 鰐子……この面白い人たちは？

博士 博士です！（男と固い握手）

柳原 柳原です。

男 あの……私には事情がよく……

博士 研究の成果ですよ！ 我々はどうとう、死者を蘇らせることに成功したんです！

男 ……おお！ それではあなた方が！

男、博士としつかと抱き合う。

男 ありがとう！ あなたは命の恩人です！

男のおなかが鳴るものすごい音。

博士 ……（うんざりと）またか……。柳原君、メシの支度じゃ！ そうだ、赤飯
じゃ！ 赤飯を炊きたまえ！

柳原、支度に向かう。博士と男は肩を叩き合う。
女だけが不満そうにしているところで暗転。

4

囲炉裏を囲んだ四人が食事を終えたところ。

博士 そもそも死ぬということは、呼吸をせず、動かなくなることなんじゃ。

柳原、全員の食器を片づけ始める。男は博士の演説を熱心に聴いている。
女は一人しらけている。

博士 ということは、死者を蘇らせるためには、再び呼吸をし、動けるようにして
やればいい。簡単なことじゃよ。

男 なるほど。

柳原 （女に）お茶を淹れてください。

女 なんであたしが。

柳原 「一宿一飯の恩」という言葉、ご存じですか？

女 ああ淹れるわよ！ 淹れりゃいいんでしょ、もう……！！

女、お茶を淹れる。柳原は食器を持って退場。

男 一体どんな方法をとられたのですか？

博士 まずもつとも大切なことは死体を腐らせないことです。冷凍保存ですな。これには外に出ればイヤというほど積もっている雪を使います。

男 なるほど。コストの節約ですな？

博士 さよう。そこに、やはり山で採れる万病に効く薬草をふんだんに入れるのです。しかしそれだけでは効果が上がらなかった。そこで今回は新たな試みおこなを行います。たのです。

男 (身を乗り出して) その試みとは？

博士 (声をひそめて) 大根ですよ。

女 (お茶を盛大に吹き出す)

博士 大根の葉をどっさり入れたのです。

女 大根の葉っぱなんかで生き返ったの？ みつともない。

男 みつともないことなんてありませんよ、鰐子。

博士 そうとも！ 大根にどれだけ栄養が含まれるか知らんのか！

女 栄養とかそういう問題じゃないじゃない。

博士 愚か者め！ わしの作った大根は特別なんじや！

女 どう特別なのよ。

博士 特別にうまいんじや。

女 余計関係ないわよ！

博士 黙れ！ 生き返ってしまえばこっちのものんじや！

男 大根、お作りになってるんですか？

博士 そうです。今年は柳原君と小さなビニールハウスも作りました。

男 ほう、ぜひ拝見したいものですねえ。

博士 いいですとも！ 早速ご案内しましょう。

博士と男、連れだって外へ出て行く。

入れ替わりに柳原が現れ、女の隣に座ってお茶を飲む。

柳原 ……ご機嫌ななめのようにですね。

女 ……。

柳原 お赤飯ならまだ残ってますよ？

女 ……それがなによ。

柳原 朝食、食べ足りなかったんじゃないやありませんか？ それでイライラしてるんでしよう。だって昨日は山盛り四杯食べたのにくらべて今朝は……

女 悪かったわよ！ 朝っぱらからお代わりなんかして！

柳原 僕は嫌味を言ったつもりはありませんよ、鰐子さん。

女 鰐子ってゆーな！

柳原 だってあなた鰐子さんじゃありませんか。だから僕は鰐子……

女 ワニワニうるさいわね！

柳原 じゃあこうしましょう。「クロ子さん」というのはどうです？ もちろん「クロコダイル」の「クロ子」です。ほら、ね？ 非常にアメリカナイズされた感じがしませんか？

女 するか！

柳原 それなら「アリゲーター」からとって「ゲタ子」……

女 （柳原の髪をつかみ）おちよくってんな？ この野郎……！！

柳原 （されるがまま）自分の名前がそんなにお嫌いですか？

女 （放して）あたりまえでしょ！

柳原 僕は好きですけどね、个性的という点ではずば抜けています。どなたが命名されたんです？

間。

女 ……院長よ。

柳原 は？

女 あたしを拾った孤児院の院長先生よ。

間。

女 ……あたしがどうしてこんな名前をつけられたかわかる？

柳原 あなたが拾われた日に、その院長先生の可愛がっていたワニが死んだからですか？

女 ……なんで知ってたのよ……。

柳原 ……。

女 なんで知ってたのよ！

柳原 信じたくありません、そんな話。

女 (床をバンバン叩きながら) それはこっちのセリフよ！

柳原、女の肩を下ウドウと叩いてお茶をすすめる。女、ひと息に飲む。

女 信じたくないのはそれだけじゃないわ。その死んだワニにはちゃんと「花子」

って名前がついてたのよ！

柳原 じゃあ、あなたは「太郎」と名付けられるべきだったんですね？

女 そーじゃねーだろ！ なんでワニが「花子」で人間のあたしが「鰐子」なのよ！

柳原 知りませんよ。その頃僕はせいぜい幼稚園児ですからね。

女 あんたといるとちつとも話が進まないじゃない！

柳原 過ぎたことはいいじゃありませんか。あなたは今や何不自由ない社長夫人でしよう。

女 何不自由ない「社長未亡人」になろうってとこで！ あんたたちが台無しにしたんでしょ！

柳原 生き返ったら殺すんじゃないですか？

女 せっかく勝手に死んでくれたのに、なんであたしが手を汚さなきゃなんないのよ！

柳原 警察になら黙ってあげてもいいですよ。

女 ……。おかしいじゃない……。そんなの不公平じゃない。殺すのが罪なら、生き返らせるのだって罪なはずよ！ 人の命に手をかけて、人生狂わせるって意味

じゃ同じじゃない！

柳原 ……ごもつともなご意見ですね。

女 感心するな！

柳原 ただ、精神異常者はその罪を問われないことになっています。

女 その代わり病院送りよ。

柳原 こんなに人里離れた山奥で、日本昔話のように暮らしているんですよ？ 充

分じゃありませんか。

女 あたしが言ってるのは……

柳原 深あい深あい山奥に、博士と柳原が住んでいました。

女 ごまかすな！

柳原 ごまかしてなんかいませんよ。証拠を見せます。

女 ……なによ、証拠って……。

柳原 博士が狂っている証拠です。

柳原、古い方の棺のそばに行き、女においでおいでをする。

女が恐る恐る近づくと、柳原はそつと棺の蓋を開ける。

女！

柳原 ね？

そこへ博士と男が談笑しながら戻ってくる。

二人、あわてて棺の蓋を閉める。

男 いやあ、誰にでも出来ることではありませんよ。(女を見て)おや？ 顔色が悪

いようだね、鱈子。

博士 赤飯ならまだ残つとるぞ？ もう腹が減ったのか。しょうがない鱈子だな。

女 おまえが鱈子ってゆーな！

男 命の恩人に向かってなんて口のきき方だね鱈子。それより大丈夫か？ どこか

具合が悪いんじゃないのかね？　もう二度と、私にあんな思いをさせないでおくれ。(女に抱きつく)

女　(離れようと) なにすんのよ！

男　先生にはなんとお礼を申し上げればよいやら……。大丈夫ですよ、先生。奥様はきつと生き返ります。現に私の妻はこうして生き返ったのですから。

博士　……妻が生き返った？

女　なににい？

間。

柳原　博士……。気分がすぐれないので、あちらで休んでもいいでしょうか……。

博士　ダメじゃ！　面倒が起こるとすぐそうやって逃げようとするのは悪いクセだぞ、柳原君。

女　(男に) ちょっと！　なにわけわかんないこと言ってるのよ！

男　一生おまえを離さないよ。(抱きしめる)

女　放せ！

柳原　博士もご存じじゃないですか。僕はほんとうにダメなんです、複雑な人間模様が。

博士　この場を君の屁理屈でどうにかしたまえ。そうでなければ、人間関係をもつと複雑にさせるぞ！

柳原　もつと……とおっしゃいますと？

博士　わしが君のことを好きになるんじゃない。

柳原　……。

博士　恋愛関係のもつれにまでなるんだぞ！　それでもいいのか！

柳原　……困ります……。

博士　ならばどうにかまとめてくれ。

柳原、泣く泣く揉み合う二人に近づく。

柳原 ……お取り込み中、失礼しますが……。

女 (柳原に蹴りを入れ) 遅いんだよ！ おめーは！

柳原 (蹴られながらも男に) この人は暴力をふるいますが、逃げはしません。放しても大丈夫ですよ。

二人、離れる。その間に柳原が入る。

柳原 話を整理しましょう。いいですか？ それではあなた方がそれぞれのよう
な過程を経て、今ここにいるのかを答えてください。ではまず鱈子さんから。

女 なんでよ。

柳原 レディーファーストです。

女 順番のことじゃないわよ、バカ。あんた知ってるじゃない。あたしが死んだこ
の人を追っかけてきたんだって。

男 なにを言ってるんだね？ 鱈子。

柳原 ご主人はいかがですか？

男 ですから、別荘の周りを散歩していたら、鱈子が急に倒れたのです。あわてて
駆け寄りましたが、もう息はありませんでした。私は後を追おうと雪の中、鱈子
を抱いて横たわっていました……。そこへこちらの先生が奇跡を起こしてくださ
ったんです！

女 そつちこそなに言ってるの？

柳原 ……もういいですか？ 博士。

博士 ちつともいいことないじゃろう。なんの解決にもなつとらん。

柳原 ……ですから、事実のひとつでも真実はひとつじゃないということ……。…。

博士 わしに屁理屈を言っただうする。

柳原 (苦しげに) ……「夫婦喧嘩は犬も食わない」と言いますし……。

博士 好きじゃよ、柳原君。

柳原 …… (顔面蒼白)

女 どうなってんのよ！ この人ボケちゃってるじゃない！
男 なぜ鱧子はこんなふうになってしまったんですか！

全員に詰め寄せられ、身を硬くして立ちつくす柳原。
やがて腹を押さえて崩れるように倒れる。

暗転。

5

夜。

柳原が寝かされている横で、男が布団を掛け直したりしている。
そこへ女が布団一式を抱えて登場。

女 まだ気がつかないの？ あんなことぐらいでだらしない。

男 そんなふうにするものじゃありませんよ。きっと繊細な青年なんでしょう。

女 (柳原の寝ている隣に布団を敷き始め) 繊細な青年が泥棒なんかするわけないでしょ。

男 泥棒？

女 そうよ！ いい？ 散歩の途中に山道を転げ落ちて死んだのは、あたしじゃなくて、あなたなの！ その死体をこいつらが横取りして、なにをしたんだか知らないけど生き返らせたのよ！

間。

男 ……どうしておまえがそんなに変わってしまったのかはわからないが……私はうれしいよ。鱧子がもう一度帰って来てくれるなんて……。

女 だから！ 生き返って変わっちゃったのはあなたなんだってば！ ねえ、覚えてないの？ 冷たい鬼社長って呼ばれて、あたしにだって「おはよう」とか「いつてくる」としか言わなくて、笑った顔なんて一度も見せたことなく、いつも偉そうにヒゲいじってて……

男 ヒゲがイヤならすぐに剃るとも。

女 そーゆーことを言ってるんじゃないのよ！

男 ……心配しないでいい……。おまえが元に戻るまで、私は何年だって待つよ。

女 あたしは生れてこのかたずーところなの！ 結婚したのはあなたがお金持ち

だったからだし、今度だって保険金がもらえるとあって大喜びしてたんだから！

男 お金ならたくさんある。好きなだけ使うがいい。だからもう私をおいていかな

いでおくれ。欲しいものはなんでもやろう。私の命が欲しいというなら、それで

もいい。約束しよう。だからお願いだ。私のそばにいておくれ。

女 ……ばつかみたい……。

男 明日、二人で別荘に帰ろう。な？ 鱈子。

女 ……。ちよつと！ あのクソジジイはなにやってんのよ！

博士、布団を抱えて登場。

博士 弱ったな。布団は三組しかないようじゃ。(敷き始める)

女 あたしに今敷かせたのは誰の分よ。

博士 わしじゃよ。柳原君の看病をしようと思ってな。

女 寝ずにしなさいよ、寝ずに！

男 私たちは夫婦なんだから布団は一組でも……

女 冗談じゃないわよ！ 絶対イヤ！

博士 仕方ない……それじゃ柳原君には一年前のように、あっちの実験用の棺で寝てもらおうかのお。

女 なによ、一年前って。

博士 一年前、実験台にちょうどいいと拾って来た死体が柳原君だったんじゃ。

男 ではこの方も生き返られたのですか？

博士 いや、ただ倒れていただけじゃった。

女 それは死体って言わないのよ。

男 なぜ倒れていたんです？

博士 死ぬつもりだったらしいぞ？

女・男 ！

博士 腹を空かせて冬山に入れば死ぬると思ったと……ん？ だったらあの時、実

験台になってくれてもよさそうなものじゃないか。なぜ柳原君は助手の座におさ

まっってしまったるんじゃ？ なあ？ 鱈子。

女 あたしに訊くな！

博士 わしがどんなに実験台を欲しがっていたか知っていながら……いじわるな柳

原君め……。バツとしてあの棺桶で眠らせてやる！ 鱈子！ 運べ！

女 なんで！

博士 おまえ柳原君の分の晩メシも食ったろう。

男 あんなに食の細かったおまえがどんぶり飯とは……（涙ぐみ）私はうれしいよ

……。

女 いい加減にしてよ、あんたたち！

暗転。

6

柳原の両隣で、博士と男がいびきをかきながら眠っている。

女は煙草をふかしている。

女 これだからイヤなのよ、年寄りは……。

男が「鰐子お」と寝言を言いながら腕を伸ばす。
女は舌打ちしながらも、布団を掛け直してやる。

柳原 「昨日の敵は今日の友」というわけですか。

柳原、起き上がる。

柳原 「雨降って地固まる」……。もつとも、「憎い憎いは可愛いの裏」と言います
けどね。

女 寝ざめのことわざ三連発とはすっかり調子はいいようね。

柳原 明日、ご主人と帰るんですか？

女 ……。

柳原 帰りますよねえ。命もやるなんて、あそこまで言われたら。

女 ……てめえ、起きてやがったな！

柳原 あんな大声出されたら冬眠中の熊だって目覚めますよ。

博士、ガバツと起き上がり「クマ！」と叫び、再び眠る。

男も「鰐子お」と手を伸ばす。

柳原 ……とにかくよかったですね。これは皮肉なんかじゃなく、あなたはご主人
の財産も愛情も手に入れることが出来たんです。

女 ……信用していいんだかどうか……。

柳原 あれは嘘をついている目じゃありませんよ。もつとも僕は人の目をちゃんと
見たことなんてあまりないんですが。

女 ……あんた、なんで死のうとしたのよ。(煙草を吸おうとする)

柳原 一本くれたら話はなしてもいいです。

女 ……。(くちむ)

柳原 ……話はなしましょう。……ところで、煙草を一本いただけませんか？

女、柳原に一本渡し、火をつけてやる。

柳原 僕は無遅刻無欠勤を誇るそれはまじめな銀行員だったんです。

女 なんでやめちゃったのよ。

柳原 定期が切れたんです。

女 ……なに？

柳原 通勤定期が切れちゃったんです。

女 バカじゃないの、あんた。

柳原 そもそもなぜ銀行に勤めたかといいますと、ご承知じょうちのように僕は、情がらみのゴタゴタが非常に苦手だからなんです。

女 それがなんだっていうのよ。

柳原 トラブルがこじれるのは、当事者をはじめ、周囲の人間までもが感情的になるからです。もちろん、誰にだって言い分はあるでしょう。しかしそれをいちいち通しては何事も解決しません。第一キリがない。「あなたを祝えばあなたの怨み、あちら立てればこちらが立たず、双方立てれば身が立たぬ」と言いますよね？

女 とつとと進みなさいよ！ イライラするわねえ！

柳原 そこで「ルール」の登場です。

女 ルール？

柳原 社会生活を保つために守られるべき決まり事ですよ。それこそが彼らを納得させ、堂々巡りを断ち切る解決への近道です。なすべきことはただひとつ。うつすらと笑みを浮かべ、しかし有無を言わさぬ厳しさで、たったひと言、こう言えばいいんです。「そーゆー決まりですから！」……（うつとりして）ああ。なんてすつきりさわやかなんだ……。

女 あほう！ そんなことですめば警察はいらないわよ。

柳原 問題はそこです。世の中にはあなたのように「ルールは破るためにある」と思っている人が意外に多いんですよ。

女 あたしのどこが！

柳原 「結婚」という約束事をきちんと理解していれば、財産とか保険金とかそういう話にはならないはずです。ですからせめて、僕は世の中で最もよく守られている約束事とともに生きようと決めたいんです。

女 最も守られてるって、なによ。

柳原 「お金」ですよ。あなたのような無法者ですら従える絶対のルールです。

女 (怒りに顔をひきつらせ) ああ、そう！ それで銀行にねえ！

柳原 ところがある日、子どもを連れられた母親が来て、僕の窓口に三万円を置きました。僕が「ご入金ですか？」と尋ねた瞬間、その子どもは置かれた一万円札を一枚手にとって……。

女 ……とってどうしたのよ。

柳原 ……噛んでいたガムを包んで捨てたんです……。僕はショックで一週間仕事を休みました。

女 ……バカバカしい。

柳原 あなたも考えた方がいい！ なんでもお金で手に入れるつもりなんでしょうが、中年男の印刷してあるそんな紙つきれなんて、ガムを包んで捨てるぐらいの役にしか立たないと言われたら、それでおしまいなんですよ！

女 子ども相手になにビビってるのよ。

柳原 ……そうです。相手は世の中のルールも、福沢諭吉も知らない子どもです。僕は気を取り直して一週間後……

女 ……福沢諭吉って誰よ。

間。

柳原 ……今日はもう遅いですから休みましょうか。

女 勝手なこと言わないでよ！ 大体あんた、いつになったら冬山に入るのよ！

柳原 ……気を取り直して、僕は仕事に行こうと駅に向かいました。そして改札を抜けようとした瞬間、すさまじい音とともに自動改札の中に閉じ込められたんで

す。ラッシュアワーの人の群れが一斉に冷たい目で僕を見る。駅員がわずらわしそうにこつちにやってくる。目の前が真つ暗になり、全身から血の気が引いていくのがわかりました。

女 ……定期が切れてたんでしょ？

柳原 恐れていたことが現実になったんだと思いました。僕は社会から締め出されたんだ、世の中の人がみんな、今まで僕の信じてきたものと違うルールを守り始めたんだ、と。そう言えば、「移れば変わる世の習い」ということわざがある。「歌は世につれ、世は歌につれ」とも言う。……もう終わりだ、人間の作り上げたルールにはもう従えない。もっと絶対的な、運命のように曲げられない決まり事はないだろうか……。

女 定期が切れてただけなんだろう？

柳原 そして見つけたのが「死」です。

女 一気にきたな。

柳原 自殺は失敗しましたが、ここにいればいつでも死の絶対さを確認できます。博士の実験が成功することは決してあり得ないんですから。

女 ……布団貸して。つきあってらんないわ。

柳原、女に掛け布団を渡す。

女 あんたがどうしてことわざばかり言うのかわかったわ。考えなくていいからよ。大昔の知恵に頼ってれば、自分ではなんにも決めなくてすむからよ。……情けない……。逃げてるだけじゃない。ちよつとでも面倒なこととは絶対にかかわりたくないって駄々こねてるだけよ。そんなに生きてくのがめんどくさいならね、死にゃあいいわよ。止めないから。死んじまえ死んじまえ。

柳原 ……鱈子さん……。

女 なによ。

柳原 触ってもいいですか？

女 ……なによ急に……。

柳原 確かめたいんです。あなたという人を。僕は逃げている。そのとおりです。「逃げるが勝ち」と紙に書いて貼っていたことだつてあるくらいです。あなたにはないんですか？ 不幸な生い立ち、愛のない生活、荒っぽい性格、へんてこな名前。憂鬱のオンパレードみたいな人生を放り出したくなることはないんですか？

女 大きなお世話よ！

柳原 不思議でならないんです。あなたを推し進める力が。その力を秘めている、あなたという形が。

女 だからつてなにも触らなくたって……。

柳原 いいですか？（と手を伸ばす）

女 どこ触ろうつてのよ！

柳原 やはり顔でしょう。「女は顔が命」と言いますから。

女 「髪は女の命」の間違いじゃないの？

柳原 髪ならいいんですか？

女 え……ちよつと……。

柳原、女の頭に手を伸ばす。

その時、男と博士が同時にガバツと起き上がる。

女、あわてて柳原から少し離れる。

博士 腹が減ったのお。（立ち上がる）

男 冷えますねえ。私、お手洗いに。（立ち上がる）

男と博士、退場。柳原と女、二人を見送る。

間。

柳原 ……なんでしたっけ。「人形は顔が命」……でしたっけ？

女 誰がそんなこと言ったのよ！ ……ちよつと待った。……あんたさつき、実験

は絶対に成功しないって言ったわよね？

柳原 ええ。

女 主人はなんなのよ！ 生き返ってるじゃない！

柳原 ご主人は……

どこからともなく「次郎…… 次郎……」という声。

やがて暗闇からぼんやり老女が現れる。

老女 次郎や……。どこへ行ったんだろうねえ……。

女 どっから入って来たのよ！

柳原 どちらさまですか？

老女 おかしいねえ。確かにこつちだと思っただけどねえ。

女 聞いてんの？

柳原 耳が不自由なんじゃないですか？

博士、ドカドカと戻ってくる。老女には三人が見えていない様子。

博士 こらあ！ 鰐子お！

女 なんだよ！

博士 おまえ赤飯の残り、こつそり食ったな！

女 食ってないわよ！

博士 正直に言うんじゃない！ わしはこつそり食ったことを怒つとるんじゃない！

赤飯がなくなったことを怒つとるんじゃない！

女 知らないったら！

柳原 博士、こちらのご婦人をご存じですか？

博士 (老女を見て驚愕) お熊！

柳原 ワニの次はクマですか……。えつ、熊つてまさか……。 (棺に駆け寄って蓋を

開ける)

博士 どうとう帰って来てくれたのか！

女 うつそお……。

柳原 博士！ 来てください！

老女 あたしの勘違いかしらねえ……。

博士 わしじゃよ！ お熊！

柳原 博士！

博士 お取り込み中じゃ！ お熊！ わしがわからんのか、お熊！

柳原 (博士を棺まで引っ張りながら) 重要なことなんです！ 見てください！

博士、棺の中を覗き込む。女も横から覗く。

博士 ……あれえ？

柳原 ……全部残ってるんです。奥様の骨は。

女 ……てことは……あの人は……。

博士 ……骨なし……というわけか？

女 そうじゃないだろ！

柳原 つまり、ここにいる奥様は、幽……

男 (戻って来て) いやあ、遅くなりまして。……なんだか台所の方で音が聞こえ

たようなので、様子をうかがっていたんですよ。……幽霊かも……と思ひまして

……。お恥ずかしい話ですが、私はお化けとかそういうものにからきし弱くて……

……。

老女 あら……。そこの方……。

男 は？

老女 社会の窓が開いてますよ。

暗転。

全員が囲炉裏の周りに座っている。

相変わらず老女には、男以外の人間の姿が見えていない。

博士 なぜなんじゃ、お熊！ どうして赤の他人は見えて、夫であるわしの姿が見えんのじゃ！

男 先生、落ち着いてください。最初からなにかもうまくいくとは限りませんよ。ここは気長にゆきましょう。

柳原と女は二人でひそひそと話している。

女 あたしたちには見えないけど、あつちからは見えるってのが普通の幽霊なんじゃないの？

柳原 さあ。普通なものにも、僕は幽霊見るの初めてですからね。まさに「百聞は一見に如かず」です。

女 どうして主人のことだけ見えるんだろう。やっぱり一度死んでるから？

柳原 その線は薄いと思いますよ。

女 どうして？

柳原 だってご主人、死んでませんもん。

老女 ほんとに次郎にも困ったもんだよ……。

博士 次郎も来とるのか！

男 次郎さん？

柳原 博士が飼ってた牛の名前じゃないですか？（女に）ね？ 昨日博士、言っただけでしたね？

女 どうでもいいわよ！ そんなことより、主人が死んでないってどういうこと！

柳原 言葉通りの意味ですよ。僕の時と同じ、死にかかっていただけなんです。博士の前世はおそらくセントバーナードなのでしょう。

老女 次郎があれよあれよという間にこっちに向かってったもんだから、あわてて追っかけて来たんだけどねえ。

博士 次郎なんか来とらんぞ！

男 見かけませんでしたよ、次郎さんは。

老女 そうですか……。

女 (柳原に) なんで今まで黙ってたのよ！

柳原 面倒くさいことになるかと思って。

女 おまえという男は〜！

老女 (ゆっくり周りを見渡し) なあんにも変わつとらんねえ。なつかしいねえ……

…。(男に) そちら様はうちの人をどこ存じで？

男 (博士を押し出し) すぐ目の前にいらっしやるんですよ？ おわかりになりま

せんか？

老女、身を乗り出し、目を細めるが、焦点はあっていない。

老女 ……(男に) あいかわらず禿げてますか？

博士 なにを言うか！ このおたふくめ！

男 確実に禿げています。(博士に叩かれる)

老女 ものすごいおならをするんですよ。

博士 おまえのくしゃみだつて雪崩がおきるかと思つたわ！

老女 デベソでねえ……。

博士 偏平足！

老女 ……うちの人は……今でもいびきをかいて寝てますかね？

男・女・柳原 そりゃあもう！

老女 あんまりグーグー寝るもんで、たまあに静かだったりすると、死んでるんじゃないかって心配になったものですよ。

博士 今頃になつてよくそんなことを言いおる！ おまえの方こそ、あの晩、急に高いびきをかいたと思つたら、心配する間もなくポックリ逝っちゃまったくせに！

柳原 脳溢血ですね。

男 ……脳溢血……。

老女 まあ、殺しても死ぬような人じゃないからねえ、いらぬ心配だったけどねえ。

博士 戻って来るなり言いたい放題抜かしおって、その上知らんぷりとは……あいかわらず無礼な女じゃ！

男 (老女に) 喜んでおられますよ！ 奥様が帰って来られて。

老女 帰って来たって、なんです？

男 え？

老女 帰って来てなんていませんよ？

男 なぜです？ だって……

老女 だって……死んじゃったんですからねえ。

男 いま現にこうして、ご自分の家にいらっしやるじゃありませんか！

老女 それは……。

間。

老女 ……次郎、次郎やあ。

男 奥様！

老女 ちよつと迷い込んだだけなんです。死んでることには変わりはないんです。

男 奥様は生き返られたのですよ！ ご主人の素晴らしい研究のおかげで！

老女 そおんなことありませんよ。

男 奥様と同じ、脳溢血で死んだ私の妻は、こうして生き返りました！ (女を老女の前に押し出す)

女 あたしがいつ脳溢血で死んだのよ！

男 こんなに元気です！

老女 ……あたしにはなあんにも見えませんがねえ……。

女 人を勝手にゾンビにするな！（男の手を振りほどく）

男 驚くほど元気なんです！

老女 それなら死んでないんじゃないですかねえ。死んだらずっとそのまんまですよ。そのまんま帰ってこないことを……死んだ……って言うんでしょう？

男 しかし！

老女 なにか勘違いじゃないですかねえ。もう一度、よく思い出してごらんなさいな。

男 勘違いだなんて……私は妻と別荘で……スケジュールにだってちゃんと（手帳を取り出し、めくる）……眼鏡がないので今は見えませんが……。

柳原 僕が見ましょう。

男 やつと休みをとったんです。彼女はとても楽しみにして……。

柳原 （手帳をめくりながら）なぜ脳溢血だとわかったんです？

男 医者が言ったんです。死亡診断書にもそう……。

柳原 （手帳をめくる手を止め、中から一枚の写真を抜き取ると男に手帳を返し）一度落とされたでしょう。汚れがひどくて判読不可能です。

男 でも間違いありません！ 妻は別荘から散歩に出て倒れ……その時、確かに死んだんです！

女 ……（柳原に）あんた今なに隠したのよ、

柳原 はあ？ なんのことでしよう。それより鰐子さん、台所に行きましょう。

女 なに言ってるのよ、今それどころじゃないでしょう！

男 私の腕の中で、氷のように冷たくなっていったんです！

柳原 おなか減りませんか、鰐子さん。減ったでしょう？ あなたなら減ってるはずです。ね、僕がなにか作りますよ。「腹が減っては戦が出来ぬ」と言いますから。

女 なにを隠したのよ！ 主人ののでしょうか？ それ！

男 ほんとうに死んだんです！ 白い……白い妻の顔が、今もこの目に焼き付いています！

柳原 あとで見せてあげます！ とにかくこっちへ……

女 いま見せなさいったら！

男 葬式も出しました、骨もちゃんと拾いました、お墓だって……！

老女 それで？ それからあなた、どうなすったんです？

男 （呆然と）それから……

柳原 （女と揉み合いになり）やめてください！

女、写真を奪いとる。

柳原 鰐子さん！

男 ……再婚しました……。

女、食い入るように写真を見る。

男 ……妻と同じ……「鰐子」という名の……若い、女性と……。

間。

女 ……なるほどね……。

女、男に写真を返す。

女 はいよ。

男 鰐子……。

女 そつちなんですよ。……本物は。

女、老女の目の前に立つ。

女 ……あなたの勝ちね……。この古いぼれどもは、生きてる人間よりも、死んじ

やったあんたたちのことで頭がいっぱいなよ。……死んだ鰐の代わり、死んだ奥さんの代わり。……いつまでたつてもあたしは身代わりでしかない。それがあたしでなきゃいけない理由もどこにもない……。そうよ。あたしは、誰のことも思わないし、誰もあたしのことを思わない。それなら……。いないもおんなじよ。あたしはあんたたち以上に、この世にいない人間なのよ……。

男 鰐子、私は……

女 いないって言うてんだろ！ そんなヤツ……。

老女 ……誰か……泣いてるのかね？

老女、ゆっくりと手を伸ばし、女の顔に触れる。

老女 若い女の子の……泣く声がしてるようだけどねえ……。

女、老女から逃げるように離れる。

間。

博士 鰐子……。ご主人を責めんでくれ……。

博士、立ち上がり、どこを見るでもなくぼんやりしている老女を見る。

博士 いなくなるというのは……理解できにくいことじゃ……。わしも、いつも思っ
つとつた……。いつかきつと、帰ってくるとな……。しかしあれから五年になる。
お熊は、骨になってしまっておった……。もう帰ってはこんじゃろう。帰ることは
あるまい。……だがな、朝起きた時、飯を食う時、畑に出る時、床とこに就く時……
もしかしたら……。もしかしたら、という思いが……。頭をもたげてやまんのじゃ……。

間。

老女 そろそろいかないといけないねえ。

博士 ……本人がこう言うのでは……あきらめるより仕方ないのお。

ミシッ、ミシッと床のきしむ音。

老女 あれあれ、次郎！

老女を除く全員が辺りを見回すが、なにも見えない。

老女 しょうのない子だねえ、探しとつたんだよ？ まあまあ、こんなにお赤飯の

粒をつけて……。

博士 おまえだったか、犯人は！

老女 おいしかったかい？ よかったねえ。大好物だったもんねえ。それにつられて来ちゃったのかい。あいかわらずの食いしん坊だよお。そうかいそうかい……。

老女、ゆっくり立ちあがる。

老女 さて、ぼちぼちいこうかねえ。(男に) あのお……。

男 はい！

老女 うちの人に伝えていただけますか？

男 もちろん。

博士 言いたいことがあるなら直接わしに言わんか、バカもん！

柳原 博士！

博士 くら！ お熊！

老女 ……おまえさん……。

男 は？

博士 こっちじゃ！ お熊！

老女 おまえさん。

博士 お熊！

男 ……それだけ……ですか？

老女 はい。

男 「おまえさん」……て？

老女 はい……。

男 そう……呼んでいた……と？

老女 （深く頭を下げ）よろしゅう……。

老女、背中を向けて、ゆっくりゆっくり闇の中へ歩き出す。

老女 さあ、いくよ次郎。ちゃんとごちそうさまは言ったかい？

老女の姿が「もおお〜」という牛の声とともに闇に消える。
残された四人、呆然と見送る。

暗転。

8

朝。

女がくわえ煙草で布団を畳むなどして囲炉裏の周りを乱暴に片づけている。
そこへ柳原が現れる。

柳原 鱈子さん。

女 ……。

柳原 鱈子さん。

女 ……。

柳原 ……僕が「鱧子さん」という時は、上品な初老のご婦人ではなく、がさつで

野蛮で血の気が多くて、短気は損気で大メシ食らいで、若い割りには苦勞人な…

…

女 あゝ！ うるさい！

柳原 ……他の誰でもない、あなたを呼んでるんです。

女 ……なんか用？

柳原 手伝いますよ。

女 いいわよ、もう終わったから。……クソジジイどもは？

柳原 二人でしんみりお弁当を作ってます。

女 ふーん……。(柳原に煙草を一本差し出す)

柳原 ……いただきます。

女、空になった煙草の箱を丸めて囲炉裏に捨てる。

柳原 ……これからどうするんです？

女 一から出直しよ。慰謝料くれるって言うから、住むところ探して仕事探して、

まっとうな人生をやってくつもり。

柳原 手伝いますよか。

女 終わったってば。

柳原 まっとうな人生を。

女 ……なんだあ？

柳原 「縁は異なるもの」とはよく言ったものです。

女 頭イカレちゃったんじゃないの？

柳原 そうですね……。まあ「蓼食う虫も好き好き」ですよ。

女 あたしについてくる気い？

柳原 「毒を食らわば皿までも」と言うか……。

女 同情だったらまっぴらよ！

柳原 同情でなければいいんですね？

女 わかった！ 慰謝料目当てだな！

柳原 …… 僕はお金に頼るのはやめたって言ったじゃないですか。物覚えの悪い人ですね。「ごちそうさま」は言えるようになりましたか？ 牛でも言えるんですよ？

女 じゃあなにしようっていうのよ。

柳原 逃げるのやめるんです。ひどい目にあうのは覚悟の上ですよ。なにしろあなたはずぐカッとなって暴力をふるうし、金の亡者^{かね}だし、一日何合ごはんを食べるかはかり知れないし……。でも僕は逃げたりしません。だから気にしないでください。

女 するわよ！ あんたねえ、もう少し人の長所にも目を向けなさいよ！

柳原 ……長所……。 (ひどく考え込む)

女 てめえ、いい加減にしろよ！ (柳原の頭をベシベシ叩く)

柳原 (叩かれながら) ああ……。煙草。

女 え？

柳原 煙草、これ最後の一本でしょう？ 惜しげもなく僕にくれました。

女 ……全然誉められてる気がしない……。

柳原 他にもたくさんいいところがありますよ。これから頑張って探します。

女 頑張らないでさらっと気づけよ！

柳原 心がけます。

女 ……キチガイ博士はどうするのよ。

柳原 博士はもうキチガイではありません。

博士 そうとも！ 失礼なことをぬかしおると弁当を渡さんぞ！

前掛けをした博士とお弁当を三つ持った男が登場。

博士 研究は終わりじゃ。助手ももう必要ないわ。

男 寂しくなられますね……。

博士 構わん構わん。そうじゃ、鰐子！ おまえに持たせるものがあるんじゃ。

女 なによお。

博士 いいから来い！

女、博士に引きずられるように退場。

間。

男 ……こんなことを言えた義理ではありませんが……私も、寂しくなります……。

柳原 ……奥様、お綺麗な方かただったんですね。

男 ですが口より先に手が出るタイプでした……。

間。

男 ……。そういう傾向の名前なんでしょうか……。

柳原 なにしろ……「鰐」ですからねえ。

博士と女が戻ってくる。

女は大根が山ほど入った大きな籠を背負わされている。

女 なんであたしがこんなもの担がなきゃいけないのよ！

博士 遠慮はいらん。ほんのお餞別じゃ。

女 (柳原に) あんた担ぎなさいよ！

柳原 (博士に) 僕にくれるんですか？

博士 いいや。

柳原 (女に) じゃあダメです。

博士 柳原君にはこれをやろう。山で採れた薬草じゃ。また腹痛はらいたの時に使いたまえ。

柳原 今回のような複雑怪奇な状況に巻き込まれることはおそらくもうないでしょう。お気持ちだけいただいでいきます。

博士 (女をチラッと見てから) 傷にも効くぞ？

柳原 ……やっぱり頂戴します……。

博士 おまえさんにはこれじゃ。(男に包みを渡す)

男 私にもですか？

博士 研究の成果じゃよ。

男 (包みを開けて) ……あ……。

女 (覗き込んで) お赤飯……。

博士 これにつられて、うっかり奥さんも出てくるかもしれん。

男 ……ありがとうございます。

博士 さあ！ 出発するがいい。特製弁当は忘れずに持ったか？ 町までは長旅だ

ぞ？ ……鰐子。

女 なによ。

博士 柳原君は、ことわざには詳しいが、頼りにならん男じゃ。

女 知ってるわよ。

博士 よろしく頼んだぞ。

女 ……じゃあね。

柳原 博士。一年間お世話になりました。

博士 まったくだ。

柳原 「命長ければ恥多し」と言いますが、そんなこと気にせず長生きしてください。
い。

博士 気にしとらんわ！ 最後までそれか君は。

柳原 すみません。

女 重いんだよ！

男 それでは……。

博士 うむ。達者でな。

柳原 博士も、お元気で。

三人、去る。見送る博士。

間。

博士、畳まれた布団一式を持ち上げ、棺の隣に運び、敷き始める。
柳原が一人そっと戻って来て、その様子を見ている。

柳原 ……博士。

博士 おお、なんじゃ。忘れ物か？

柳原 博士……まさか……。

間。

博士 ……心配要らん。この五年間、走りづめじゃったからな。ちよつと休みたく
なっただけじゃ。

柳原 そうですか……。

博士 死にはせん。

柳原 はい……。

博士 ゆっくり眠るとするよ。ぐっすりと深あく……そうじゃな、死の手前ぐらい
までな。

柳原 ……わかりました。

博士 いったまえ。

柳原 はい。……では博士、おやすみなさい。

博士 おやすみ。

柳原、去る。

博士、布団に入る。やがてごうごうといびきをたてて寝始める。
いびきの音が遠ざかるように小さくなってゆくにつれて、ゆっくりと暗くな
る。